

博士論文審査及び最終試験の結果

審査委員（主査） 塩原朝子 印

学位申請者 佐近優太

論文名 コーパスに基づくインドネシア語の接頭辞 *ter-*の研究

【審査の経過と結論】

佐近優太氏から博士学位請求論文「コーパスに基づくインドネシア語の接頭辞 *ter-*の研究」が提出されたことをうけ、2022年9月14日開催の大学院総合国際学研究科教授会にて審査委員会が設置され、審査が開始された。

審査委員会は、塩原朝子（本学アジア・アフリカ言語文化研究所教授）を主査とし、降幡正志（本学総合国際学研究院教授）、野元裕樹（本学総合国際学研究院准教授）、大谷直輝（本学総合国際学研究院准教授）、長屋尚典（外部委員：東京大学大学院人文社会系研究科准教授）の計5名の委員から構成された。

各審査委員による論文の審査および2022年11月18日に実施された最終試験の結果、審査委員会は全員一致で同氏に博士(学術)の学位を授与することが適切であるという結論に至った。

【論文の概要】

本論文のテーマはインドネシア語の接頭辞 *ter-*の機能の考察である。インドネシア語の接頭辞 *ter-*による派生プロセスには次の3種類がある。

- ・他動詞的意味を持つ語基に付いて受身文の標識となる
- ・自動詞的意味を持つ語基について非意図の意味を表す
- ・形容詞的意味を持つ語基に付いて最上級の意味を表す

先行研究による上記の用法の扱いには、事例に基づいた接頭辞 *ter-*の記述の検討や用法の定義がされていない、代表的とされる意味・用法の考察は行われているが非典型的な意味・用法が見過ごされている、上記の3つの用法間の関係が議論されていないという問題点がある。本稿ではこの点を解消すべく、以下の5点を試みた。

(1) 接頭辞 *ter-*が表す意味について先行研究の記述を検討した上で、事例に基づいてより明

確に分類する。(第2章)

(2) (1)の分類における複数の意味を統一的に捉える。(第3章)

(3) 受身文を形成する接頭辞 **ter-**に対して与えられた分析が自動詞語基の場合の意味表出の制限や、構造変化の有無を説明できることを示す。(第3章)

(4) 前置詞 **oleh** との関係を実例に基づいて記述し、出現要因を明らかにする。(第4章)

(5) 2章で行った分析を基に、動詞用法の接頭辞 **ter-**と最上級用法の接頭辞 **ter-**の関係を説明する。(第5章)

以下各章の概要を述べる。

1章では研究の目的、本論文で使用するデータ、インドネシア語の形態統語論の概略と本論文で用いる術語の定義を行った。

2章では **ter-**が用いられた際に現れる意味の分類を行った。先行研究では接頭辞 **ter-**は「結果状態」「可能」「非意図」のようなさまざまな意味を付与するとされてきた。しかし、多くの先行研究において、これらの意味分類にかかわる用語は、明確に定義されることなく用いられてきた結果、一つの研究内においても用語に揺れがあったり、研究者間で同じ用例に対して異なる分類がなされていたりするという問題があった。そこで本稿ではコーパスや web 上の例文を参照して接頭辞 **ter-**が表す意味について「事態の中のどの部分に際立ちが与えられているか」を基準に完了・非意図・判断・潜在系可能の4つに分類した。この4つは先行研究においても意味のラベルとして用いられてきたものであるが、ここで上記の基準で再分類したわけである。上記の4カテゴリーのうち完了用法の下位には文脈的条件によって分かれる結果状態と認識との相違用法を設定した。

続く3章では、2章で定めた接頭辞 **ter-**が付与する意味の分類を基に、事象構造の考え方をを用いてそれぞれの意味の表出の仕組み、構造変化の有無を決める要因、接尾辞 **-kan** との関係、の3点を明らかにした。議論の前提として本稿では接頭辞 **ter-**の事象構造を「動作主が存在し、動作対象に働きかけを行い、その働きかけによって動作対象が何らかの状態に変化するという事態を基に、その動作対象に生じる事態つまり事態成立局面、または行為の非意図性が認知的際立ちを帯びる」と定めた。意味の表出について、先行研究では接頭辞 **ter-**は「なる」的表現(cf. 池上 1981)であるとして、そこから種々の意味が派生すると考えられていた。しかし、この分析には自動詞語基の場合に可能の意味などが表出しない原因を説明することができないという問題点があった。そこで本稿では上記のように接頭辞 **ter-**の事象構造を設定し、語基の事象構造との合成が行われると考えることで説明を試みた。具体的には自動詞語基との合成の場合には動作主の分節が合成結果に表れないために、動作主の意図を含意する必要がある可能の意味などが表れないと分析した。構造変化や接尾辞 **-kan** に関しても同様に、事象構造の考え方をを用いることで一貫した説明を与えることが可能になることを示した。他動詞語基に接頭辞 **ter-**が付与された場合、基本的に受身文の

述部の主要部となるが、一部の語は能動文に現れることが出来る。こうした能動文での接頭辞 **ter-**+他動詞語基はこれまで例外とされ、詳しく分析されてこなかった。しかし本稿では、具体的には認知的際立ちの位置が変化すれば構造変化が起こり、認知的際立ちの位置が変化しなければ構造変化も起こらないと分析した。これは語基の事象構造に動作主から動作対象への働きかけが含まれているかで決まり、働きかけが含意される他動詞では、認知的際立ちの変化が起こるため受身文となり、自動詞や働きかけが含意されない他動詞では認知的際立ちの変化が起こらず能動文になることを示した。最後に接尾辞 **-kan** について、先行研究では接尾辞 **-kan** を伴っていれば可能の意味が出やすいことが指摘されていたが、その理由は明らかになっていなかった。本稿はこの問題に対しても事象構造の考え方をを用いることで解決を試みた。結果として、意味の帯びやすさは接尾辞 **-kan** が直接影響しているというよりも、接尾辞 **-kan** によって事象構造が変化したためであることを明らかにした。このように 3 章の意義は、事象構造を設定することでこれまで例外的に考えられてきた現象を統一的に説明できることを示した点にある。

4 章では接頭辞 **ter-**の受身文における動作主標示の選択要因について考察を行った。インドネシア語の受身文において、動作主は主に英語の前置詞 **by** に相当する **oleh** か、それが省略された形である **zero** 標示によって導かれる。先行研究ではこうした選択があるのはもう一つの受身接辞である接頭辞 **di-**の場合に限られ、接頭辞 **ter-**の場合は省略できない、つまり **oleh** 標示しか使うことが出来ないと分析されてきた。しかし実際の用例を観察すると、接頭辞 **ter-**の場合でも **zero** 標示を取るものが多く見られる。ここから本章では実際のどの程度 **oleh** 標示と **zero** 標示が使用されているかを記述するとともに、その選択要因を明らかにすることを試みた。分析にあたっては動作主・動作対象の有生性、動詞の意味、動作主項の語数を考慮し、一般化線形混合モデルに基づくロジスティック回帰分析を行った。結果として以下の点が明らかになった。

- ・「動作主から動作対象への働きかけ」が強ければ **oleh** を取りやすく、弱ければ **zero** を取りやすくなる。
- ・動作主が有生物である場合、無生物の場合よりも **oleh** を取りやすい。
- ・動作対象が有生物である場合、無生物の場合よりも **zero** を取りやすい。
- ・動作主の語数が多いほど、**oleh** を取りやすくなる。

本章の意義は、一般的な傾向に加えて動詞固有のふるまいも分析したという点である。回帰分析により動作主標示選択の一般的傾向として上記の点を明らかにした後、個々の動詞を変量効果に入れたことを利用して、一般的傾向から外れるふるまいを示す動詞に関してその理由の考察を行った。結果として他構文との曖昧性解消という動機や、共起する名詞の偏りによって動作主の標示選択が変化することを示した。

5章では最上級の意味を持つ接頭辞 **ter-**に関して考察を行った。先行研究では最上級の接頭辞 **ter-**は動詞語基の場合に生じる完了の意味からの類推で生じたとされてきた。しかしこの分析は調査対象となる資料が限られており、具体的な事例が少ないという問題点があった。そこで通時コーパスを用いて用例を検討することで、1700年代までは形容詞的意味を持つ語基に接頭辞 **ter-**が付いた場合は「語基が表す状態への変化」を表す標識として機能し、最上級の用法が卓越するのは1800年代以降であることを明らかにした。加えて接頭辞 **ter-**派生形容詞が *segala*「すべての」や *lainnya*「他の」などを伴う名詞句との比較の文脈で現れやすいことを指摘した。こうした発見から、接頭辞 **ter-**は「完了 > 語基の表す状態への変化 > 最上級」という変化を経たことを提案した。つまり元来接頭辞 **ter-**は「語基の表す状態への変化」という意味であったが、「すべての」や「他の」という意味を表す語と共起し「すべてのものより～である」という実質的な最上級の意味で使われることが多くなり、その結果現在の最上級としての用法が定着したという主張である。この分析の提案の利点は二つある。一つは語基の表す状態への変化という意味を表すと考えることで、動詞語基に付いた場合の意味の一つである完了と同じように意味表出を捉えることが出来るようになる点である。もう一つは類義形式である *paling* との差異を説明できる点である。先行研究では接頭辞 **ter-**と *paling* の差は基本的に無いとされてきた。しかし *paling* が多くの語と共起できるのに対し、接頭辞 **ter-**は接続する語基に制限があり、その理由が明らかになっていなかった。そこで本稿ではその理由について、前述した古典マレー語における「語基の表す状態への変化」が影響していると主張した。現代インドネシア語において、状態変化を表す接辞に接頭辞 **meN-**があり、そうした接頭辞 **meN-**は段階的变化を含意する形容詞にしか付けることが出来ないという制限がある。そして古典マレー語における意味が現代インドネシア語に影響を与えているとすれば、接頭辞 **ter-**も接頭辞 **meN-**同様に接続可能な語基に偏りがあるという仮説を立て、調査を行った。結果として、接頭辞 **meN-**が接続できる語は接頭辞 **ter-**とも結びつきやすいことが明らかになった。この結果は接頭辞 **ter-**は古典マレー語における意味の影響があるため接続する語基の種類が狭まったことを示唆すると考える。

以上本稿の内容を述べてきたが、この研究の意義は次の三点にまとめられる。第一に、これまで記述の少なかったインドネシア語の接頭辞 **ter-**について、实例に基づいた分析を行った点である。これにより、これまで見逃されてきた接頭辞 **ter-**に関する言語事実が明らかになり、それを前提に先行研究を見直す形で新たな分析を提示することができた。第二に、抽象的スキーマを維持しつつも語基の意味という細部に注目することで、意味表出の傾向や条件を説明することを可能にした点である。接頭辞 **ter-**には本稿で言及したように様々な機能がある。先行研究では動詞語基に付く場合の複数の意味について「なる」的表現の形成といった説明によって一般化が図られてきた。しかし本稿ではある接辞を使用するためにはそうした抽象的なスキーマのような概念を設定するだけでは不十分であり、よ

り詳細な知識を想定する必要があるという点を主張した。具体的には語基の意味に注目し、接頭辞 **ter-**との相互作用を考えることで諸現象の説明を行った。こうしたアプローチは今後インドネシア語の他の多義的接辞の研究に適用できると考えられる。第三に、語基・語根の意味に幅を認めることがインドネシア語の接頭辞 **ter-**の分析をする際に有効であることを示した点である。例えば **ter-**動詞の中には同じ形式が能動文と受身文の両方を取りうるものがある。この理由を動詞が二つ意味を持っているといった動詞そのものの性質に求めるのではなく、「話者がその語基をどのように捉えているか」で変化するという柔軟さを認めることで、ルールを増やすことなく一貫した説明を与えられることを示した。

【最終試験の概要】

2022年11月18日14:00～16:00に最終試験を実施した。学位申請者が論文の概要を説明し、その後各審査委員との質疑応答が行われた。

審査委員が高く評価した点を以下に挙げる。

本論文はインドネシア語の接頭辞 **ter-**の派生プロセスとそれが付接した動詞（以下 **ter-**形動詞）の多様な機能を意味・構造の両面から統一的に記述する試みに成功している点で優れている。意味および構造の把握のため従来のインドネシア語研究の枠にとらわれず、認知言語学の先行研究で用いられてきた枠組み（「なる」的特徴を適用している点や幾つかの問題をそれぞれ問題の性質に合致した手法（現代語および古典マレー語のコーパスデータの活用、クラスター分析、ロジスティック回帰分析などの統計的手法）を用いて解決している点も評価される。

本論文のインドネシア語学に対するとりわけ大きな貢献は、上記の議論を通して接頭辞 **ter-**の派生プロセスについて語基の属性と **ter-**動詞の意味の相関関係を明らかにした点、これまで明確に規定されてこなかった「認識との相違」用法を定義した点、**ter-**動詞の最上級用法の歴史的生起過程を明らかにしたという点である。

その一方で、議論の展開と内容に関する(i)-(ii)の問題点が指摘された。

(i) 2章と3章では用例の観察に基づく意味分類の提示からそれを統一的に説明するための意味（「なる」的特徴）の設定、その意味的特徴だけでは網羅できない派生プロセスの把握のため、Langacker (1990)の事象構造の考え方に基づくスキーマの設定とそれを用いた用例の解釈を行っているが、その議論の流れが必ずしも明確に示されていない点が見受けられた。

(ii) 一部、用法の記述と分析の区分が不明確である点が見られた。上記の行為連鎖モデルを用いたスキーマにより実際に行われているのは言語事実の解釈（とその可視化）であるにも関わらず、スキーマ適用によりあたかも現象に説明を与えているかのような記述が見

られる。加えて動作主標示の有無などに文体の違いが影響している可能性があるため、本論文で主に用いられている書きことばのコーパス以外のデータも検討する必要があるとの指摘があった。

こうした疑問点や指摘に対する学位申請者の応答は、本論文で明らかにされた点やその限界、今後の課題とすべき点を踏まえた的確なものであった。

いずれの指摘も本研究がインドネシア語研究における重要な貢献であるという認識のもと、よりよい議論の進め方を指摘し、今後の課題を示唆したものでもあり、本論文の価値を損ねるものではないことも確認された。博士論文の審査および最終試験の結果から、審査委員会は全員一致で、学位申請者佐近優太氏に博士（学術）の学位を授与することが適切であるとの結論に達した。